

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26300010

研究課題名(和文) 東北タイ・メコン河中流回廊における多民族文化圏の生活誌

研究課題名(英文) Folk History in the Middle Mekong Corridor

研究代表者

永田 好克 (Nagata, Yoshikatsu)

大阪市立大学・大学院創造都市研究科・准教授

研究者番号：70208023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：タイ東部のナコンパノム県を中心として現地調査を進めた。メコン河対岸のラオス側に比べて情報が少なかった村単位の民族分布と地域内での住み分けについて一定の成果を得た。合わせて行った基本語彙の録音採取は、周辺言語の影響が少ない話者の減少に鑑みて今後貴重な記録資料となるものである。伝統食のひとつである魚の発酵食品の生産方法に関する調査では、民族ごとの差異を明確にするには至らなかったが、自家消費用の生産が幅広く堅持されている中で、用途によって原材料の構成比を変えていることが明らかとなった。農具に関する調査では、より広域に中国南部との関連を検討する必要性を確認できた。

研究成果の概要(英文)：Field surveys were conducted mostly in Nakhon Phanom Province in the Northeastern Thailand. Information on village level distribution of ethnic groups in Thai side of the middle Mekong corridor has become richer than before and can be linked to information on that in Lao side. Voices of basic vocabularies of each ethnic group were recorded. Under the situation of difficulty in finding authentic speakers, these records are precious materials of ethnic identity for next generation in this area. Surveys on fermented fish which is one of local traditional processed foods revealed no significant difference in processing among ethnic groups; however, it is remarked that many families still continue to produce many variety of fermented fishes for their domestic consumption and they choose proper ratio of basic materials such as salt and rice husks for different cooking recipes. Further research must be required on relationship of some agricultural tools between those in southern China.

研究分野：地域情報学

キーワード：国際研究者交流 メコン河中流 東北タイ 生活誌

1. 研究開始当初の背景

タイの東北地方に居住する人の多数はタイ・ラーオと称するラーオ族でありシャム族とは異なる民族である。加えて東北タイはラーオばかりでなく、プータイなどの多民族で構成される。ラーオの一農村ドンデン村での詳細な調査で生業や村民の移出入を含む生存戦略の詳細を明らかにした福井捷朗らの研究や、河野・永田により東北タイのヤソトン県全農村を対象にした村落類型の考察はあるが、地域の多民族性は考慮していない。メコン河の東北タイ側の支流であるソクラー川流域の開拓農村の形成過程に関する研究で永田が得たデータからは、出身地が遠方に及びラーオ以外の民族の村民が少なくないことや隣国ラオスでの居住経験を持つ村民も少なくないことが明らかになった。

ラオスの村落単位の民族分布は永田が『ラオス村落情報システム(LAVIS)資料集』で明らかにした。一方で、メコン河をはさんでラオスの対岸に位置する東北タイでは、多民族構成であることはこの地域で認知されているが、詳細な実態はラオスほど明解ではない。

本研究では、タイ東北部とラオスとの国境をなしているメコン河両岸地域を「メコン河中流回廊」と表現する。メコン河中流回廊ではメコン河を中心として地域社会を形成していたが、19世紀末にシャムとフランスがメコン河を国境と定めて以降政治的には分断された。地域社会を結ぶメコン河を共有しつつ、政治的経済的環境の差異のもとで両岸は異なる変容を経験してきた。今日「国境にもかかわらず継続している地域性」と「国境によってもたらされた地域社会の変容」の両者が混在していると考えられる。

右岸タイではタイ化が、左岸ラオスではラーオではなく多民族共生国家としてのラオス化がはかられてきたこの地域社会の変容について、住民のアイデンティティの継続性の視点を含んだ詳細な研究報告は寡聞である。多民族社会であることが十分に認知されているタイ北部と比べても、明らかに多民族性に立脚する研究報告の数が少ない。政治的に地域を分断してきたメコン河に近年国際橋が相次いで開通し、地域をつなぐ役割を加速しつつあることを鑑みると、このメコン河中流回廊を対象とした多民族共生の生活誌を学術的に記録し解明することは急務である。

2. 研究の目的

(1) 左岸ラオスの村単位の民族構成について、詳細なデータは保有する。一方、右岸タイも左岸ラオス同様の多民族構成であることはこの地域の通念であるが、ラオス側と対比できるレベルの民族分布に関する資料がない。このために、村落単位の民族分布を明らかにする。さらに現在地への移住前の母村など、メコン両岸地域内での相互往来ネットワークも明らかにする。

(2) 農漁業はこの地域での生業の基幹である。農具や農法など農業技術、灌漑などの農業土木技術、漁具や漁法など農業技術の変遷から、生業文化の継続性と変容の実態を明らかにする。また生業と密接に関連して、食材・食文化の不変性と可変性についても解明する。地域内での生業文化の異同を規定する要因として地縁的背景と民族的背景のいずれが優位であるかも明らかになる。

(3) 住民の生活を規定する伝承や慣習の内容や起源、宗教儀礼や民間儀礼の日常生活への重みについて、メコン右岸地域内での異同の実態を明らかにする。

タイにおいても地方の多様性が見直されつつある昨今、この地域社会の住民が自らのアイデンティティを再構築する機会が訪れている。広範囲の生活誌を明らかにすることは、地域住民がアイデンティティの源泉として継続する文化、変化を受容する文化について将来検証可能な基礎資料となる。

(4) 国際研究交流としてナコーンパノム大学(NPU)との共同研究を進める。NPUはメコン河流域研究所を付置し地域の研究拠点となることを目指しており、共同研究の機会を設けることは、研究志向人材の育成に寄与する。

3. 研究の方法

基礎調査として民族分布と村落史概略に関する現地調査をメコン河中流回廊右岸の東北タイ・ナコーンパノム県で行い、多民族性の詳細を明らかにするとともに、詳細調査の対象を選定する資料とする。現地調査は、地元ナコーンパノム大学(NPU)との共同で進める。

詳細調査は、村落史詳細と伝承・慣習・地域の知ならびに農漁業の生業文化についての調査を研究分担者参加のもとで、ナコーンパノム大学の協力を得て行う。

4. 研究成果

(1) 村レベルの民族分布について当初は調査票形式での調査を実施したものの、回答内容を精査した結果から多民族分布の地域内差異が明確にならなかった。そのため、ナコーンパノム県庁文化課の支援により県内諸民族の代表者らが参集する会議を開催し、諸民族との連絡窓口を確保して民族分布に関する情報の収集を行った。

本課題期間中に訪問調査を行った村での聞き取り結果に基づいて作成した民族分布図が図1である。悉皆調査ではないため本図はナコーンパノム県全域の状況を表現するものではないことに注意が必要である。

ナコーンパノム県では2014年時点においてラーオ、ヨー、カルーン、プータイ、ソー、カー、セークの7民族の存在を認知し、さらにクアンについての認知を検討中であった。加えて、移民としてのベトナム系住民も無視

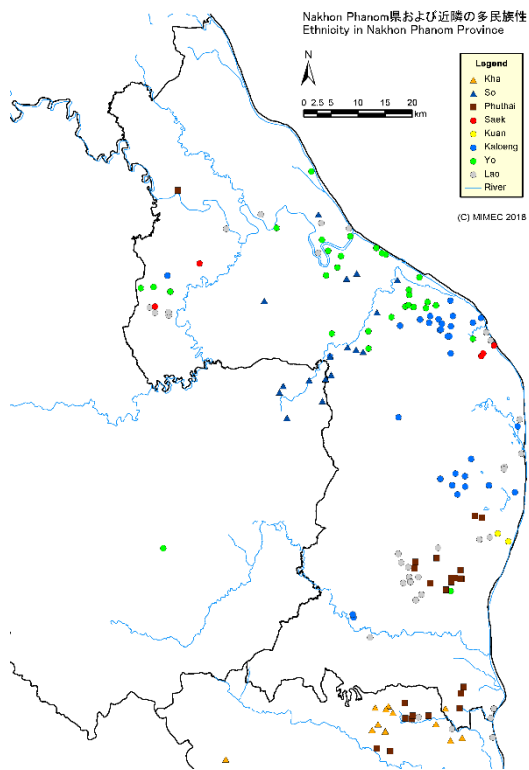


図1 民族分布

できない存在であり、県を挙げての各種の祝祭行事では民族色を前面に出した催しが行われている。本課題による調査で民族性について明らかになったことは以下である。

① 地域内の主要河川であるソクラーム川の下流域では、概ね右岸側にヨー(黄緑色の丸印)が、左岸側にラーオ(灰色の丸印)が分布する。混住する村落も多く基本語彙にほとんど差異は現れない。メコン河対岸のラオスの1995年国勢調査による民族調査ではヨーはラーオの別称扱いであり統計上の区別がなされていない。

② ソー(濃青色の三角印)はター・ウテン近くでメコン河に合流するトゥアイ川に沿って隣のサコンナコーン県のクスマーンまで分布する。クスマーンにはソー族博物館があるほか、隣接するナコーンパノム県ポーンサワーンもソーの住民が言語・文化・慣習の維持に尽力している地域である。ラーオとは基本語彙が大きく異なる。ラオス側の民族調査ではマーコンンとして分類されておりナコーンパノム県およびムックダーハーン県の対岸に数多く分布する。

③ カルーン(青色の丸印)はナコーンパノム県内中部から南部にかけて幅広く分布している。基本語彙はラーオと大差がない。ラオス側の民族調査ではラーオと区別されていない。

④ プータイ(茶色の四角印)はナコーンパノム県南部から南に隣接するムックダーハーン県に幅広く分布しており、この地域を代表する民族として広く知られている。現地調査によれば、習俗や語彙の違いから、プータイの中には二ないし三のサブグループがあるという

のが、住民の主張である。

⑤ カー(橙色の三角印)はナコーンパノム県内では一村しか確認できないが、隣接するムックダーハーン県北部では多数派である。ムックダーハーン県側ではブルーと自称しており、また、ソーの一派であるとの認識もある。基本語彙はソーと共通するものが多い。カー(ブルー)の中心地であるムックダーハーン県ドンルアンでは会話の主体はブルーの言語である。

⑥ セーク(赤色の丸印)はまとまった数の住民が県都ナコーンパノム近くに居住しているものの、都市圏に取り込まれて久しく、近隣多数派ラーオとの差異に関する調査は容易ではなかった。遠隔地に点在するセークの村についても他民族との混住の割合が高く、独自言語の維持は困難に見える。ラオス側の民族調査でもセークとしてラオスを構成する民族の一つとなっているが、人口稀少である。

⑦ 言語の面では、ラーオ、ヨー、カルーン、プータイ、セークのタイ系民族では特異な差は確認できていないが、本来セーク語は他のタイ系民族とは異なり北方タイ語であることから検討の余地がある。また、クアンについてはラオスとの比較が必要といえる。一方で、ソー、カーの両民族は、モン・クメール系言語の特徴を残していると考えられるが、これについても言語学の知見を加えた調査が必要である。

現在使われている地名には標準タイ語化されたものが多数ある。過去の地名をさかのぼることによって、当時の呼称に近い表現を再現できる可能性がある。古い地図から地名を採取するための資料収集を進め、また、現在の地名との関係について、引き続き整理中である。

(2) 地域の伝統食として魚の発酵食品を取り上げ、その生産方法について、対象地域であるナコーンパノム県29世帯、また隣接するブンカン県1世帯、ムックダーハーン県2世帯、そしてサコンナコーン県1世帯、合計33世帯に対して、聞き取り調査を実施した。ここで取り上げた伝統的な魚の発酵食品は、プララー(Pla-ra)とソンプラー(Som-pla)の2種類である。淡水魚を塩とデンプン(米糠)と混ぜて発酵させるプララーは、乳酸発酵によって、うま味成分が生成される魚の塩辛であり半年以上発酵させ、魚肉を積極的に分解させ、魚肉ではなく主に液体を利用する調味料である。近年は、沿岸部の工場で大量生産された安価なナムプラ(Nam-Pla)と呼ばれる魚醬が普及しているが、それでも東北タイでは、プララーの需要は多い。一方のソンプラーの発酵は3~4日間で、魚の形はそのまま残っており、魚肉を食するための食材である。

調査の結果、プララーには、様々な生産方法が見られたので、ここでは、プララーについて報告する。プララーは、塩を加えて腐敗

を防ぎながら、魚肉の自己消化酵素と微生物の消化酵素で発酵するもので、塩の加減や加えるデンプンの量や種類によって、味や臭いに違いが生じる。今回調査した 33 世帯のうち、30 世帯がプララーを生産しており、そのうち、26 世帯が自家消費用であった。表 1 は自家消費用にプララーを生産する 26 世帯についてまとめたものである。

サンプル数が少ないため、民族ごとの差異について論じることはできないが、プララーの生産のために使われるデンプンの供給源としては、一般的に米糠が使われていることが明らかになった。しかし、カオコアと呼ばれる米を煎ったものを使う世帯もわずかながら見られた。プロセスについては、26 世帯中、11 世帯が、魚を塩で揉んでから、数日間放置し、その後にデンプンを加えて発酵させるプロセスを採用していた。おそらく、塩で数日保存させることで、腐敗の原因になる雑菌を死滅させてからデンプンを加えることで、味が良くなるということを経験的に獲得したプロセスだと考えられる。しかし、この方法が、民族ごとに受け継がれてきたのか、それとも地域による差なのか、このサンプル数だけでは判断できない。

なお、今回の調査で興味深かったことは、用途によって、塩の量と米糠の量を変えていたことである。特に、商業的なプララー生産を行っている世帯では、スープなどに使う一般的な調味料としてのプララー（プララー・ゲーンなどと呼ばれる）は、米糠と塩を使う量が多く、臭いが弱い。一方、パパイヤ・サラダのソムタムに使うプララー（プララー・ソムタムなどと呼ばれる）は、米糠と塩を使う量が少なく、臭いが強い。このような、用途による生産方法の違いは、商業用に生産する世

表 1 プララーの生産方法

民族	調査世帯数	プロセス (a)	供給デンプン	
		2段階	米糠	煎った米
Thai Lao	6	2	6	1 ^(b)
Phuthai	2	2	1	
Phuthai Renu	1		1	
Thai Yo	3	1	2	1 ^(c)
Thai Kuan	2		2	
Thai Kaloeng	4	1	4	
Thai Katung	1		1	
Thai So	2	2	2	
Thai Saek	2	1	2	
Thai Kha	3	2	3	2 ^(d)
計	26	11	24	4

- a 魚に塩をすり込んだ後に何日か置いてから、デンプンを供給するプロセス。
b どちらか一つと答えたのが 1 世帯。
c 煎ってなくても使うことができると述べる。
d 米糠と煎った米の両方を入れると答えたのが 1 世帯。どちらか一つと答えたのが 1 世帯。

帯だけに見られる特徴で、自家消費でプララーを生産する世帯は、用途によって異なるプロセスは採用されていなかった。また、商業的生産では粃米を入れる工場も見られたが、自家消費用の世帯では存在しなかった。

プララーの生産に関しては、様々な違いが確認されたが、現在においては、それが民族的な差異、もしくは地域的な差異と言えるとは考えられない。ただし、商業的にプララーを生産する世帯においては、消費者の用途にあわせて 2 種類のプララーを生産していることが明らかになり、伝統的な調味料プララーのローカルなレベルでの商品化が進んでいることが明らかになった。

(3) 各村落の歴史に関する聞き取りの結果、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてラオス側からタイ側に移入し定着するまでにより良い稲作環境を求めて複数地域を転々とした事例や、洪水が頻発する大河川沿いの村落と丘陵地との間で魚とコメを交換する食料相互補完ネットワークを構築している事例などが明らかになった。これらは稲作の収量と安定性を規定する水文環境が地域社会の発展形態を規定してきたことを示すものである。つまり、氾濫頻度や水田の湛水頻度などを広域的に把握することによって地域社会を定量的に可視化できる可能性があり、この着想が合成開口レーダを用いた水田の分類を広域的に行うことを目指した星川の次期科研（基盤研究(C)「合成開口レーダを利用した東北タイ農村地域発展経路の再評価」平成 29 年度～31 年度）につながっている。

(4) 生産工具および生業に係る道具類では、ラオスと比較して顕著な民族間の差異は確認できない。これは、メコン河中流回廊左岸はルアン山脈を後背とするのに対して、東北タイはコラート高原という相対的に単一な生態環境に起因するものと考えられる。しかしながら、ラオスでは各地域各村において特徴的農具類が残されている一方で、本研究の過程において着目した牛車の完品はほとんど残されておらず、ナコーンパノム県内各地で比較的保存状態の良いものがみられ、特に屋根材として *Bauhinia* 属の葉が使用されていることが確認できたことは新たな知見といえる。

耕具に関しては、園江が行ったラオス全域および周辺地域での調査結果を裏付ける情報が得られた。ラオスにおいて水田の耕起は、北部では中国系枠型揺動犁が用いられるのに対して、本研究地域の対岸である中部以南においては、Y 字形の犁体を持った揺動犁と櫛形の耙の組み合わせで行われており、タイ国内では現在機械化が進み実作業では使用されなくなってきているものの、調査地全域において同様の耕起体系が確認できた。

一方で、サトウキビの糖液を得るための甘蔗圧搾機については、ラオス中南部ではほとんど確認できていないのに対して、中国南部-

ラオス北部地域に限定的と考えられていた山形歯車の個体が保存されており、この系譜について再検討が必要となったといえる。

また、この地域の重要な生業を担う漁具では、民族によらず大掛かりな筌築から大小の籠筌や簀子筌、魩(えり)まで多様な利用がみられ、大小河川・沼・水田それぞれの水文環境に合わせて使用されている。特に、水田漁撈は規模的には小さいながら生活に密着した重要な生業といえる。刺し網や四手網などでは、ナイロン製の市販品を購入しているものの、その他の伝統漁具は自ら製作したり村落内の名手から譲り受けることもある。

このほか、木洞によるトウヨウミツバチの養蜂やコミツバチのハニーハントがみられ、メコン河を跨いで交易される生態資源としての役割は小さくない。

(5) ナコーンパノム大学(NPU)の研究者らの協力により進めた現地調査により、国際研究交流として寄与できた点は以下である。日本側のメンバーが複合的な専門領域であったことから、NPU側でもこれに対応するために部局横断で協力者を人選した。そのため、学際的に幅広い視点で調査対象を観察し議論する機会を共有した。地域社会の民族・文化・生活様式の多様性と国境をまたいだ交流の歴史に目を向けた研究トピックが数多くあることについて理解を深めたことと考える。また、日本に招聘し、地域文化の記録と発信にかかわる多様な施設を見学して議論する機会を持ったことで、現地調査における基礎的なデータを地道に収集する意義について見識を深めてもらうことができた。

このほか、本研究での人脈を契機として園江は学生レベルの定期的な交流活動を開始した。このことは、長期的な視点での市民レベルの交流と相互理解につながるものである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- ① 永田 好克, タイのデジタル地名辞書基盤の構築, 情報処理学会シンポジウムシリーズ, 査読有, 2017(2), 2017, 29-34
- ② Nagata Yoshikatsu, Geographic names on old maps of early 20th century toward a spatio-temporal gazetteer: A study on their accuracy in Northeast Thailand, Pacific Neighborhood Consortium Annual Conference and Joint Meetings (PNC), 2017, 査読有, CFP17M10-ART, 2017, 98-103, DOI 10.23919/PNC.2017.8203528
- ③ 園江 満, ラオスにおける蜜蜂の文化誌, ビオストーリー, 査読無, 27, 2017, 58-59
- ④ 園江 満, タイ文化圏から見るラオスの

社会と文化—地域と近代の相克—, IAM-e マガジン, 査読無, 21, 2017, 1-14

- ⑤ 星川 圭介, Patarapong Kroeksakul, 天水稻作卓越地域における農業土地利用変化と水文条件—タイ国東北部の事例—, 農業農村工学会論文集, 査読有, 85(1), 2017, 85-92

[学会発表] (計5件)

- ① 永田 好克, タイのデジタル地名辞書基盤の構築, 人文科学とコンピュータシンポジウム, 2017
- ② 横山 智, 過去70年のラオス農村の人口動態と生業, 2017年度海外学術調査フォーラム, 2017
- ③ 園江 満, ラオスの社会と文化を考える—タイ文化圏の視点から—, アジア近代化研究所, 2017
- ④ Yoshikatsu NAGATA, Adjustment of geographic coordinates of triangulation points in Gaihozu of Mainland Southeast Asia, 5th Annual ANGIS Conference, 2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田 好克 (NAGATA, Yoshikatsu)
大阪市立大学・大学院創造都市研究科・准教授
研究者番号: 70208023

(2) 研究分担者

横山 智 (YOKOYAMA, Satoshi)
名古屋大学・環境学研究科・教授
研究者番号: 30363518

星川 圭介 (HOSHIKAWA, Keisuke)
富山県立大学・工学部・准教授
研究者番号: 20414039

園江 満 (SONOE, Mitsuru)
日本大学・生物資源化学部・講師
研究者番号: 90646184

柴山 守 (SHIBAYAMA, Mamoru)
京都大学・国際戦略本部・研究員
研究者番号: 10162645